

第一章

この物語は妹の死によって突如、始まる……しかし、妹はなかなか死なない。

「ふわあ〜〜ねむい〜〜」

少女はピンクの髪を揺らながらいった。あくびを噛み殺し、いつものことではあるが、凄く眠たげな声である。

「ねえ……真剣勝負の真っ最中なんだからさ。もうちよつとビシつとしてよ」

「だってだってさ、夏花ちゃんつてば今日……腐腐腐腐〜〜」

スリーピーな仕種で返事をする。

その横顔たるや、萌え萌えキュン☆

地球上に残された全大きなお兄ちゃん達が一匹残らず鼻血ブーで悶死しそうなぐらい、一億円(ミリオネア)・ロリスマイルである(自分でいってて、ひでえ悪文だよ)。

「なんだよ、さつさと構えなよ」

一方、向かい合っていた少女は金髪ツインテールである。

ピンクにはやや劣るものの、こちらは垢抜けた感じがする美少女だ。

場所は体育館。

二人共、白い袴(あわせ)に紺色の袴。剣道少女といった、いでたちだった。

金髪ツインテール、碧眼のスポーティーな美少女。

そして、少女の手にはそれぞれ、透明な棒状のものが握られている。

あれは——ビニール傘だ。

「覚悟はいい？ はかな」

「昨日は深夜アニメをはしごしまくったから、死ぬほど眠いんですけど……」

「今日という今日のはあんたを王座から引きずり下ろして、ナギ兄とキャツキャツウフフな放課後を過ごすのよ！」

「夏花ちゃんもたいがい、人の話、聞かないよね……ふぁ」

妹は小さくあくびを噛み殺す。

はかなの構えは剣道そのもの。

一方、夏花はというと、後ろ手で高くビニール傘を持ち上げ、さながら槍を構えるかのような体勢だ。場の空気は突如として緊迫する。小窓から一部始終を観察していた俺も、思わず固唾を呑んだ。

『平家落武者流うくくコンビニ剣法！』

『れでい、ごお！』

美少女達の咆哮(ほうこう)が、森閑(しんかん)とした体育館に木霊(こだま)する。

最初に突貫したのは、夏花だった。

「今日こそ、ナギ兄いと下校するのよ！」

「ふわぁ〜」

あくびを噛み殺しつつ、ビニール傘で受けるはかな。二つのビニール傘が空中で激突する。

……お前ら、小学生か？

だが、鏝競りあいになると、火花がシュババババと散った。

コンビニ傘で火花！？ 俺は思わず驚愕する。彼女達の部活風景を見るのは、これが初めてだったからだ。

「くっ！ 相変わらず、ガリガリのくせしてやるわね！ はかな！」

「くっ！ っていったら『殺せ……』って、続けないといけないんだよ、夏花ちゃん！」

「あたしはこの女騎士よッ！」

「女騎士にしては、胸が別の意味でマイクロビキニ……」

「うっさい！」

五月のハエと書いて、五月蠅（うるさ）い。

夏花は文字通り、牛が尾でハエを追うみたいにビニール傘ではかなを払う。はかなが風雅な技巧の剣（傘だけ）だとしたら、夏花はパワー任せの破壊の剣といったところだろう。技の一号、力の二号だ
な。

「胸囲だけならわたし、夏花ちゃんに三、四センチは勝ってるもんね！ うほほ〜い！ うほほ〜い！」

「あたしは一部の青少年の需要にすべからく、応えているだけだあ！」

夏花は激怒しながら後方へ飛んだ。

腰の裏に隠した『からからくん チリ味』と書かれた紙袋から、唐揚げ串を四本、取って、投擲する。唐揚げ串はく（・）ない（・・）のように一直線に飛翔するも、はかなは冷静にビニール傘を開いた。それはまるで透明なバリアーである。

プツプツと音を立て、串がビニールへと突き刺さる。

だが、その行動すら読んでいた夏花は、傘を振り上げて、跳んだ。

「遅い！」

はかなが素早くビニール傘を閉じる。

唐揚げ串が刺さったまま、一太刀を受け止めた。

「やるわね、はかな！」

「じい〜」

無言でジト眼になる、我が妹君。

「なによ！ その死んだ魚が腐ったような眼は！？」

「いや、あのねー」

先ほどまでの百合っぽいキャツキャツウフフは影をひそめ、はかなの顔は一瞬で素に戻っていた。真顔になった、というやつだ。

「夏花ちゃんってさ……いい加減、お兄ちゃんにコクつたら？」

「なななななななななななな——ッ！」

夏花は耳から首まで真っ赤になる。頭のとっぺんから、ぶっしゅうと、湯気まで出ていた（古典的漫画表現）。

「ふわあ、スキあり！　っと」

はかなが丸っこい何かを彼女の足元に転がした。

味玉、高菜、豚角煮、オムライス、品数豊富なコンビニのおむすびだった。よく見ると、おむすびとおむすびの間が紐のようなもので結ばれている。端っこで火花が散っているということは、火もついているらしい。

あれは……導火線？

連結されたおむすびは大蛇の如く、少女の足首へと絡みつく。

「うわ！　あつ、あんた、ず、ず、ずっこい！」

足を取られた夏花は、コロコロと体育館の床を転がっていった（おむすびはこの後、スタッフみんなでおいしくいただきました）。

「フッ、決まった……平家落武者流コンビニ剣法新興義『しっとりおむすび型連結（チェーン）触発（マ）機雷（イン）！』」

「びぎゃんッ！」

コケた夏花の上で無常にもボボボボン！　と連続して爆発してゆくおむすび達。

どうやら、具の中に大量の火薬が内蔵されている模様だった。味玉、高菜、豚角煮、オムライス、数々の具材と白米とが四散し、あどけない夏花の顔面をエロ汚(きたな)く汚したのであった。

「勝ったよ？ お兄ちゃんw」

ドヤ顔で俺の方を振り向き、ビニール傘を畳む我が妹……。

こいつら。

やってることがホント、小学生レベルだなッ！

× × ×

——平家落武者流コンビニ剣法とは？

解説するのもまた、バカバカしい。実に萎えるネーミングセンスである。

驕る平家は久しからず……かつて、源平合戦の世の後。この東北地方まで逃れた平家の落武者達が残した隠し剣を、暇を持て余した夏休みの高校教諭がスポチャン風アレンジしたのが、このニューススポーツ。もう一度いう。

平家落武者流コンビニ剣法（すぐください）。

基本ルールは簡単である。①コンビニで売っているものを武器として用いること。②負けたと思ったら、そこで試合終了。ただそれだけだ。

この町で人氣に火がつき、今や全世界で競技者人口四千人。一応は国際大会まで開かれるようになったし、役場では適齡期の男女を集めて「コンビニ劍法お見合いパーティー」なるものも開いている。

ちなみに、昨年 of インターハイでは、全国一位の座を我が妹、中泉はかなが勝ち取った。二位は従妹の夏花。このアホらしいスポーツで、ワンツーフィニッシュを親族でキメてしまったという出来事は、この田舎町でも格好のからかいの的だったりもする。

申し遅れました。

この妹と従妹のバカバカしい最大トーナメント決勝戦を観客席から応援し、今も体育館の小窓から「なんとなくエッチなハプニングでも起きてないかな？」と覗いてみたら、自分を巡って（？）女の子達がビニール傘でビチバチ叩きあつた果てに数珠繋ぎのおにぎりが爆破されるといふというシュールな光景を目撃してしまった超高校級果報者。中泉（なかないずみ）朝風（あさなぎ）（17）とは、俺ちゃんのことです。

黒髪、中肉中背、成績普通。

特に良くはないけど、さりげなく平均より上ではあるラノベやギャルゲーの主人公顔、これといって特徴もないから、読者のみんなは自分の顔でも当てはめて、ニヤニヤウヒウヒしながらこの物語を読んでくれると、おばあもありがたいさー。

そもそも、ハーレムもののラノベって、バイトの休憩時間に隅っこで一人、ニヤニヤペロペロしながら読むものだったのに、昨今では普通に深夜アニメ化されるようになってきたよなあ。公共の電波に晒（さら）されるのはいいけど、「へえ、こういう脳みそが足りてない女が好きなの？ 妹と幼馴染みが修羅場で十

一人いて、可愛いわげがないなら、だから何ナノ？ 死ぬの？ クソキモイですけど、この「ニート豚」とカリアル妹にいわれてヒイヒイしながらも、なんだかイイ感じの冷や汗かけちゃう、世知辛い世の中になつてきたよね！

それはともかく、なんの話してたんだっけ？ 妹の話か？ 実妹？ 異母妹？ 義妹？ 洋妹（ようま）い）？ ブレンド妹（まい）？……じゃなかった、俺の話か？ いや、こんな俺にも一つ、大きな特徴があつてね。

それは、妹が入ったお風呂の水を残らず飲み干せるレベルの超シスコンであることだ。
うん。

全然、飲みきれよ！ お風呂の水ぐらい！

なにあの口どけまるやかな超神水！ 妹様極（きわみ）聖水超マンセー！

妹の超おいしい水、超飲める。むしろ山梨県南アルプス市あたりの工場で超大量生産して日本全国のコンビニ及び自販機に超出荷して欲しい。夏には夏季限定でレモン味の超お小水や五リットルの超徳用ボトルも……（クラウド出版検閲 自粛）。

× × ×

閑話休題。

はしやぎすぎて、開始早々、スカネタかまして編集部から厳重注意食らっちゃった！ てへへる♪

近親相姦を奨励し過ぎて、この小説が出版差し押さえになる前に、いい加減、本編に戻るとしましう。オホン！

水田の青々とした稲が風にそよぐ。

谷間の町を囲むようにして、なだらかな丘陵に棚田が幾つもの段を作っている。

ひつじヶ丘は市町村合併で名前が変わり、今でこそ愛らしい名前になっているが、昔は羊首村と呼ばれる平家落人の里だった。

なぜ、羊首村か？

それは「羊の首」という題名しか残っていない怪談に由来するらしいが、今となっては定かではない。名物は銘菓「ひつじ焼き」と三角形の油あげ。

「ふわぁくく。お兄ちゃん、待ったあ？」

ピンクの髪を揺らし、スポーツバッグを抱えたはかなが女子更衣室から出てきたのは、それから三十分後だった。

「お前なあ……」

待ちくたびれていた俺は、すっかり冷めた眼差しで彼女を迎えた。

「むむ、なんなの？ お兄ちゃん。その腐れ鯖寿司みたいな眼は？」

「腐れ鯖寿司ってお前……」

「いや、なんとなくお兄ちゃんのイメージに近い、生理的に受け付けなさそうなニオイがプンプンする食物（しょくもつ）をサラッと捏造（ねつぞう）してみました」

「いきなり手厳しすぎない！？」

おののきながらも、これは「お兄ちゃん好き好き愛してる！ 今すぐだいしゅきホールド！」というブラコンの発露の裏返しと拡大解釈し、俺は妹と校門を後にした。うむ、はかなも性的な意味で難しい年頃だからな。きつとそうに違いない。

薄汚れた門柱には、「〇〇県立ひつじヶ丘高校」と浮き彫りされた、青銅製の看板が掛かっている。学校の周囲三百六十度が水田で囲まれているという、田舎の公立高校だ。

幸い、東京から越してきた俺達兄妹にとっては、こんな風景すらも、新鮮だった。

「ふわぁ……早く帰って寝たい」

「……あのね、はかな」

「なに、ヘンタイお兄ちゃん。誰に断って肺呼吸なんかしてるの？ キモイから今月中に死んでよ虫ケラ」

「……あふう」

「ごめん。謝るから、ホントに死のうとしないで」

妹の命令通り、息を止めて絶命しようとしたら、脳死状態になる直前に、はかなが謝ってきた。

「で、なんの話だっけ？ クソムシ☆お兄ちゃん」

「いや、『☆』とか付けても可愛くないから」

「ウジムシⓄ→↑→お兄ちゃん」

「格ゲーのコマンドみたくなってませんかッ!？」

俺は「ゴホン!」と咳払いをして、五秒ほど待ってから、兄の威厳を取り戻すようにしていった。戻ってこい、兄の威厳!

「はかな、毎日、下校が黄昏どきになるのはいただけいな。お兄ちゃんは早く帰って『姉・AO』をやりたかったんだけど」

『姉AO』とは、今流行のネットゲである。

いわゆるRPGだが、キャラ及び職業選択が妹、姉、お兄ちゃん、弟の四種類のみという強制肉親マジキチ仕様。正式名称は「シスター・アート・オンライン」。

「奇遇だよ。はかなも早くおやすみして、深夜アニメに備えたい」

「お前のニート予備軍な生活習慣病はともかく、俺ちゃんのネットゲ廃人的生活環境は守ってくれなきゃ」
そういうと、珍しくはかなは眼を大きく見開いていった。

「そんなの、夏花ちゃんにいつてくれなきゃ」

「むう……それは確かにそうだな」

「あの子には、つくづく手を焼いてるんだよ」

妹は依然、眠たげながらも、心底、面倒そうに溜め息をついた。

従妹の夏花は、俺の前では妙にツンツンしている。

こないだも居間でゲームしていたら、気が付くと二人きりになってしまっていて、急に奴がソワソワし始めていた。

「あ、あたしは別にナギ兄のことなんて、どうでもいいんだからね！」

「あ、そうでござるか……ピコピコ（レトロ擬音）」

「そ、それから、れ、冷蔵庫の中に作り過ぎたバウムクーヘンがあるけど、た、食べたければ食べていいのよ？」

「バウムクーヘン作り過ぎた!？」

バウムクーヘンって確か、ケーキを年輪みたいにして焼くんで、一個、作るのに物凄く手間暇がかかるって話だ。なんだ？ ここんち、いつからバウムクーヘン職人の家になったんだ？

「べ、別にあんたのために作ったんじゃないんだからね！」

夏花は急にそっぽを向いて、鼻をふくらませた。

「い、インドから、届いた初摘み（ファースト）紅茶（フラッシュ）もあるんだからね！ す、好きなだけ淹れてあげたっていいのよ？ べ、別に、農場から個人輸入したわけじゃないんだからねッ！」

「クソめんどくせえ！」

みたいな感じで、重過ぎる愛情を日常的に押し付けてくる。

さつきも俺と一緒に家まで帰る権利を賭けて、実妹であるはかなと決闘していたらしい。決闘って、何時代の産物だよ。

「……で、夏花は？」

「負けたから、おにぎりの後片付けしてる。今日のところはお兄ちゃんを譲ってくれるんだって。そういうところは律儀だよねー」。

「だよな」

「あの娘、厳密にはツンデレですらないから、変なところでマトモなのよね……」

兄妹そろって、溜め息をついた。

残念ながら、夏花は、ただのツンデレではなかった。

賈(にせ)ツンデレ——。

夏花のキャラは夜な夜な、俺の部屋から拝借した十八禁美少女ゲームをやり続けたことによって、スポ根的に会得した「擬似ツンデレ」である。そのことはすでに家族はおろか、友人、隣近所、その他、最寄りのコンビニ店員にまで、とりあえず、本人以外にはバレバレだった。

金色の髪も、もちろん地毛などではない。「家や美容院で染めようとする、大人の人に怒られる」との理由から、夜の公園の水飲み場にて、ブリーチの上からサランラップを巻いて自分で脱色しており、碧眼はカラーコンタクトである。

「話し言葉もあいつ、ホントはド方言、丸出しなのになあ」

「あ、お兄ちゃん、寄り道してこ？」

田んぼ道を抜けて、商店街まで来ると、ふいに、はかなは人の話をガン無視して、足を止めた。ま、こうした冷たさも、エロい意味での屈折した愛情表現と、俺は解釈しているが。

「部活してたから、なんだかお腹が減っちゃった」

「またか。お前、ホントに買い食いとか好きだよな？」

呆れながらも付き合うことにした。

兄妹でいるときはたいてい俺がおごる。こつそり財布の中身を確かめる。月末でしんどいところだが、せっかく、かわいい妹との帰り道なのだから、おやつぐらいはおこつてやらなくては――。

「おじさん。浜名湖産上蒲焼ひとつ」

「あいよ、はかなちゃん。千六百円」

「高(だけ)えよ！」

間髪入れずにツッコんだ。

はかなが迷わず駆けて行ったのは、持ち帰り専門のうなぎ店、「うなぎキチ」の店頭だった。カウンターでねじりハチマキのおじさんの焼く炭焼きのうなぎから、香ばしい香りが風下へと流れていく。

普通のうなぎ店とは違い、店内でうなぎが食べられないので、ろくに客が並んでいない。こんな店がよく商店街でやっていけると、かねてより不思議だった。

「をい……はかな」

「なあに？ お兄ちゃん」

「どこの世界に、うなぎの蒲焼を立ち食いして帰る女子高生がいるんだよ？」

「ええ？ だって、うなぎだよー」

そういうって、彼女はオヤジから、うなぎの串を受け取った。

「にゆるにゆるだよー。触手プレイだよー。はふはふ、うなぎ、らめー」

「ハアハア……はかなちゃん、エロい……」

串に刺さったうなぎをペロペロしながら、おっさんを欲情させている。俺はその横で財布を取り出し、淡々と千六百円を払う。高いので、俺は食うつもりない。

はかなもさることながら、大丈夫か？ この店。

「お前も夏花も、俺のエロゲーを隠れてやりすぎなんだよ」

「はい、キモイお兄ちゃんには肝(きも)」

「ダジャレで軽く返されちゃった!？」

はかなは焼き鳥の串に刺さった肝(三百円)を差し出してきた。勿論、お金を払うのは、これも俺である。うなぎの後だと激安に感じるけど、某ハンバーガー店なら中堅クラスのバーガーが買える値段だぞ。

俺達は店先のベンチに腰掛けると、それぞれ、うなぎと肝にパクついた。

はかなは口元をたれで汚し、ご満悦のご様子。

「お前、ホントにうなぎ好きだよな？」

「子供の頃、お祭りのうなぎつかみとかしたよね？」

「ああ、やったな。スーパの盆踊りだったっけか？」

「はかな、あれ、結構好きだったよ」

そういつて、またパクツと、うなぎを一口。

うなぎつかみとは、スーパのお祭りでビニールシートを敷いたプールに、いっぱいうなぎを放して、つかみ取りをするというイベントだった。

捕まえると、参加賞として蒲焼を一串もらえる。うなぎの値段が高騰している現在からは考えられないぐらい豪華なイベントだが、普通の女の子だったら毛嫌いしそうな感じである。はかなはああいうとき、嬉々としてうなぎまみれになるガキだった。

「あの頃に、戻りたいなあ」

妹は食べ途中の蒲焼見つめ、呟いた。

妙にシリアスな口振りだと思った、そのとき――。

「お、お兄ちゃん、ちよつと！」

「え？」

突然、はかなに袖を引かれる。

顔を上げると、目の前のブロック塀を乗り越えている黒い人影があった。

真っ黒なフードをかぶった大男だった。初夏だというのに、やたら暑そうな服装。顔は隠れていたが、

ベルトにはジャラジャラとシルバークセサリーのチェーンをつけて、背中には鮮やかな金刺繍の文字で

「関東百鬼暗愚総長 隠摩羅鬼」と書かれていた。

彼は、ひらりと俺達の目の前に着地する。

うお、こええ。カラーギャングだ。

「関東百鬼暗愚」は何となく読み方はわかるが、「隠摩羅鬼」の方は何と読むのだろうか？

そう思いつつも、咄嗟に妹をかばって前に出る。

「香典泥棒よ！ そいつをひっ捕まえて！」

遠くから悲鳴に近い女の声が響いた。

黒いスーツの女が黒髪を振り乱しながら、路地裏から駆けてくる。その迫力に、カラーギャングもたじろいだのか、こちらを軽く一瞥し、繁華街の方へ駆け出して行く。香典袋と千円札を、ねずみ小僧のように撒き散らしている。誰も見てなかったら、拾って、うなぎ代にするんだけどな……。

すると、はかなが無言で俺の袖を引いた。

「お兄ちゃん……追って！」

「ええええええええ！？ マジっすか？」

こういうときに妹の力をあてにしているわけじゃないが、彼女は部活用のコンビニ傘は手にしていない。わけのわからないコンビニ剣法とはいえ、傘を持ったはかなは、剣道の男子有段者ぐらいの実力はある。でも……傘がない。いや、別に懐かしの名曲のタイトルじゃありませんよ。つか、俺がなんとかする流れ

つすかね？ コレ？

「帰宅部でつちかった俊足を、今こそ見せるときだよ！」

「ムリムリムリ！ むしろ追いつけたら悲劇しか待ってないよ！ 相手、ガチムチマツチョだったよ！？」

見てなかった！？」

「だいじょうぶだよ☆ お兄(サンド)ちゃん(バック)！」

「あれ？ 今、なんかルビが変だったよ！ はかなさん？」

「はかなは生きる(お兄)盾(ちゃん)を装備した」

「やーめーてー！」

背中をグイグイ押してくる妹に対し、俺は全身全霊をかけて、幼児の如くイヤイヤをした。だって、悪いお友達が五百人以上、いそうな人だったよ！ 醸(かも)すオーラが、カ○カウファイナンスっぽかったよ！

はかなは兄のあまりのヘタレっぷりに、ふうと頬を膨らませた。

「ああいうのは見逃さない方が……いいと思うなあ。社会正義的に」

「え〜。お兄ちゃんはまだ、死にたくなく〜い」

「もう……カツコ悪いなあ。ふわあ」

眠そうにあくびを噛み殺す。こんな状況でも眠いんすか？

「てめえ——！ せめて袋だけでも置いていきやがれ！ それがないと困るんだよ！」

俺達の騒動をよそに、黒服の女は雄叫びをあげながらカラーギャングを追ってゆく。よく見ると鬼太郎のように片眼が黒髪で隠れていたが、なかなかの美人だ。美人なのに果敢なことですね。超他人事だけががんばって。

「凄い人だなあ、はかな」

「そうだねえ、げふ」

「ん？」

なにげなく振り返ったとき、「あぐツ、あぐツ」と激しく彼女はむせかえった。

「はかな！」

「ううん、なんでもない。ちよつと、はしやぎすぎ……」

その直後――。

世界（・・・）が（・・・）、スローモーション（・・・）になった。

うなぎが串ごと落下する。

それと同時に、はかなは音もなく、垂直に崩れ落ちる。

俺は彼女がいう通り、脚と反射神経には自信がある。地面すれすれのところで、はかなを身体ごとキヤツチする。

「はかな！」

「お兄ちゃん、大丈夫だって」

彼女は薄目を開けて、よろよると立ち上がった。

「ちよつと眠くて……」

はかなの頬を涙が一筋、流れ落ちたのを、俺は見逃さなかった。

その涙は、ピンク色だった――。

× × ×

――血涙病(けつるびよう)。

十万人に一人しか罹(かか)らない奇病である。

髪や瞳がピンクに染まり、しばしば眼からは血液混じりの桜色の涙が流れる。これらはブラッド・テイ
アーズ (B・T) というウイルスによるもので、全身にまわると、重度の臓器障害、呼吸困難などを起
こし、最終的には止めどなく、ピンクの涙を流して死に至る。

治療法は解明されていないが、空気や飲み水の良い場所だと患者の生存率が高まる。そこで患者は高原
や温泉地での療養が国によって奨励されている。

ただ、それも不治の病に対する気休めに過ぎないのだが……。

俺達がひつじヶ丘にやってきたのも、はかながこの病気に罹（かか）ったためだった。

(い)まで